

SPODフォーラム2018ポスターセッション「優秀ポスター賞」受賞取組一覧

投票場所:香川大学幸町北キャンパス OLIVE SQUARE 2階 多目的ホール

投票期間:平成30年8月29日(水)17:40~平成30年8月30日(木)13:00

表彰式:平成30年8月30日(木) 情報交換会時

テーマ	発表代表者		共同発表者	
	所属		氏名	氏名(所属)
質保証のための 卒業生インタビュー調査	高知大学	SPOD加盟校	塩崎 俊彦	小島 郷子(高知大学) 立川 明(高知大学) 杉田 郁代(高知大学) 高畑 貴志(高知大学) 黒田 さやか(高知大学)
小学校教諭経験を生かした 大学でのAL実践基礎づくり	高知学園短期大学	SPOD加盟校	宮崎 大樹	
初年次リーダーシップ科目による 学び合いの風土作り	甲南女子大学	SPOD加盟校外	佐伯 勇	
日本の大学におけるStaff Developmentの 論点と課題	愛媛大学	SPOD加盟校	竹中 喜一	上畠 洋佑(愛媛大学) 清水 栄子(愛媛大学) 中井 俊樹(愛媛大学)

SPODフォーラム2018ポスターセッション取組一覧

日時:平成30年8月29日(水)17:40~19:00

場所:香川大学幸町北キャンパス OLIVE SQUARE 2階 多目的ホール

ポスター番号	テーマ	発表代表者			共同発表者
		氏名	所属	SPOD加盟校	氏名(所属)
1	コンピテンシーの気づきを促す自己評価の可視化	松本 高志	阿南工業高等専門学校 創造技術工学科	○	小松 実(阿南工業高等専門学校 創造技術工学科) 川畑 成之(阿南工業高等専門学校 創造技術工学科) 山田 耕太郎(阿南工業高等専門学校 創造技術工学科) 太田 健吾(阿南工業高等専門学校 創造技術工学科)
2	学生と育てるLMS ~CHUKYO MaNaBo活用推進の 成果と課題~	満田 清恵	中京大学 学術情報システム部 情報システム課		森 純菜(中京大学 学術情報システム部情報センター) 東 玲名(中京大学 学術情報システム部情報センター)
3	質保証のための 卒業生インタビュー調査	塩崎 俊彦	高知大学大学 教育創造センター	○	小島 郷子(高知大学 大学教育創造センター) 立川 明(高知大学 大学教育創造センター) 杉田 郁代(高知大学 大学教育創造センター) 高畑 貴志(高知大学 大学教育創造センター) 黒田 さやか(高知大学 学務課)
4	評価・IR担当者に必要な 知識・スキルを考える	髙田 敏行	茨城大学 全学教育機構		橋本 智也(四天王寺大学 IR・戦略統合センター/教育学部)
5	理工系分野における FDプログラム開発の展開ver4.0	榊原 暢久	芝浦工業大学 教育イノベーション 推進センター		吉田 博(徳島大学 総合教育センター)
6	小学校教諭経験を生かした 大学でのAL実践基礎づくり	宮崎 大樹	高知学園短期大学 幼児保育学科	○	
7	初年次リーダーシップ科目による 学び合いの風土作り	佐伯 勇	甲南女子大学 人間科学部		
8	組織の安定運営を支える「優しい」SD -若手職員育成の課題解決への示唆-	松村 典彦	金沢大学 スーパーグローバル 大学企画・推進室・ 国際部留学企画課 留学推進係		上島 洋佑(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室)
9	講義のアクティブラーニング(AL)度を 可視化する指標(BAL)を活用した、 全学的なAL推進の試み	中嶋 克成	徳山大学 福祉情報学部		寺田 篤史(徳山大学 経済学部) 河田 正樹(徳山大学 経済学部長) 岡野 啓介(徳山大学 学長)
10	看護教員と教育開発者による 初年次導入科目設計と評価	中島 正世	神奈川工科大学 看護学部看護学科		伊藤 勝久(神奈川工科大学 教育開発センター) 鈴木 慶孝(神奈川工科大学 非常勤講師)
11	日本の大学におけるStaff Developmentの 論点と課題	竹中 喜一	愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室	○	上島 洋佑(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室) 清水 栄子(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室) 中井 俊樹(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室)
12	学習支援担当者に求められる能力・スキルとは -米国専門職団体を事例として-	清水 栄子	愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室	○	岸岡 奈津子(立命館大学 学生部OIC学生オフィス) 山崎 その(京都外国語大学 総合企画室) 中井 俊樹(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室)
13	新入生を対象にした 大学に対する価値観に関する調査 -徳島大学SIH道場の改善にむけて-	上田 勇仁	徳島大学 総合教育センター	○	塩川奈々美(徳島大学 総合教育センター)
14	ミクロレベルのFDから 教育の質保証へとつなげる試み	Mazur Michal	北海道大学 高等教育推進機構		山本 堅一(北海道大学 高等教育推進機構)
15	FDerによる授業公開と 「教・職・学」ピアレビュー	三苫 好治	県立広島大学 生命環境学部		
16	中四国高専による 共通シラバス作成およびビデオ教材開発	衣笠 巧	新居浜工業 高等専門学校	○	西井 靖博(新居浜工業高等専門学校) 土居 俊房(高知工業高等専門学校) 長山 和史(高知工業高等専門学校) 青木 薫(米子工業高等専門学校) 藤井 貴敏(米子工業高等専門学校) 中野 陽一(宇部工業高等専門学校) 杉本 憲司(宇部工業高等専門学校)

ポスター番号 1

コンピテンシーの気づきを促す自己評価の可視化

- ◆発表代表者 松本 高志 (阿南工業高等専門学校 創造技術工学科)
- ◆共同発表者 小松 実 (阿南工業高等専門学校 創造技術工学科)
- 川畑 成之 (阿南工業高等専門学校 創造技術工学科)
- 山田 耕太郎 (阿南工業高等専門学校 創造技術工学科)
- 太田 健吾 (阿南工業高等専門学校 創造技術工学科)

◆発表概要

阿南工業高等専門学校では、平成 26 年度文部科学省大学教育再生加速プログラム（テーマⅡ：学修成果の可視化）に採択され、その取り組みの一つとして学生の獲得するコンピテンシーの可視化に挑戦している。プログラムの目標は、学生がコンピテンシーを身につけ、自身のキャリア形成に活用することである。対象コンピテンシーとしては国立高等専門学校機構の定める 12 の分野横断的能力のうち、ステークホルダーである企業が求める上位 6 能力を対象とした。今回、正課授業、課外活動（部活動、学生会活動等）、その他（寮生活、学外活動等）の 3 つ場面におけるそれぞれの能力獲得状況を学生が自己評価した結果をリーダーチャートで可視化し、LMS を介して各学生へフィードバックすることができた。本発表では、コンピテンシー育成を目標とした正課授業で実施した学科横断 PBL 型授業のアンケート結果等と併せてコンピテンシー育成の取組について報告する。

ポスター番号 2

学生と育てる LMS ～CHUKYO MaNaBo 活用推進の成果と課題～

- ◆発表代表者 満田 清恵 (中京大学 学術情報システム部情報システム課)
- ◆共同発表者 森 純菜 (中京大学 学術情報システム部情報センター)
- 東 玲名 (中京大学 学術情報システム部情報センター)

◆発表概要

中京大学では、2017 年秋学期に新 LMS (Learning Management System: 学習管理システム) を導入した。新システムはシラバスシステムと連動している点が特徴で、学生は受講している授業について、シラバスに記載されている授業計画や学修到達目標を確認しながら学習を進めることが可能となっている。教員側のメリットとしては、シラバス作成と授業管理が一つのシステムで行えること、シラバスに沿った教材作成がしやすいことにある。これらの特徴を踏まえ、単に学生の学習を管理するのではなく、学生が主体的に学ぶためのシステムにするには何が必要か。学習者を中心においたシステムを、学生とともに育てている現状の成果と課題について報告する。

質保証のための卒業生インタビュー調査

- ◆発表代表者 塩崎 俊彦 (高知大学 大学教育創造センター)
- ◆共同発表者 小島 郷子 (高知大学 大学教育創造センター)
- 立川 明 (高知大学 大学教育創造センター)
- 杉田 郁代 (高知大学 大学教育創造センター)
- 高畑 貴志 (高知大学 大学教育創造センター)
- 黒田 さやか (高知大学 学務課)

◆発表概要

高知大学では、大学教育再生加速プログラムの一環として、ベネッセ総合教育研究所との共同研究を行い、高知県内と首都圏に就職した卒業後1～5年の卒業生とその就職先の上司にインタビュー調査を実施した。卒業生調査は、これまでも様々な形で実施されているが、コストとそれに見合った調査結果が得られにくいなどの現実的な問題とともに、卒業生を評価する尺度をどのように定めるのかなど、理論的な課題があった。

本報告では、インタビュー調査を通じて、卒業生が大学生活のどのような場面でどのような能力を身につけたと感じているか、就職先の上司は卒業生のどのような能力、パフォーマンスを評価しているかについて、高知県内に就職した卒業生と就職先上司のコメントを、首都圏のそれと比較し、地域で活躍する人材育成に向けた教育改善の方向性について報告する。

評価・IR担当者に必要な知識・スキルを考える

- ◆発表代表者 鳶田 敏行 (茨城大学 全学教育機構)
- ◆共同発表者 橋本 智也 (四天王寺大学 IR・戦略統合センター／教育学部)
- ◆発表概要

大学評価コンソーシアムでは、評価・IR担当者のための議論の場の提供だけでなく、業務に必要な知識・スキルをとりまとめ、さまざまなセミナー等も開催している(ループリック:能力要素別段階評価表)。現在、このような研修コンテンツの開発やそれらの運用経験、各勉強会等での参加者の方々からの意見などをもとにこの「ループリック」について改訂を進めている。改訂案をもとに会員対象の実態調査(今年7月)を行い、その結果で最終調整を行う計画である(今年8月)。

これらの取り組みから見てきた最新の状況を踏まえた評価・IR担当者に必要な知識・スキルについて、ポスターを用い、SPODの来場者の方々に情報提供を行うのと同時に、議論をしたいと考えている。

理工系分野における FDプログラム開発の展開 ver4.0

◆**発表代表者** 榊原 暢久（芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター）

◆**共同発表者** 吉田 博（徳島大学 総合教育センター）

◆**発表概要**

理工系分野の学問は長い歴史の中で知識の体系化が進み、積み上げ式による基礎知識の習得が求められることから、特に初年次では大人数授業、知識伝達型の講義になりやすい傾向がある。アクティブ・ラーニングの導入が叫ばれている現在においては、学生の主体的な学習を促進するために、理工系講義形式授業においても、適切なアクティブ・ラーニングの実施が求められる。

筆者らは、2012年より理工系講義形式授業に特化したFDプログラムを開発し、参加者アンケートをもとに、数回のプログラム改善を行いながら実施してきた。2018年8月に香川大学で開催されるSPODフォーラムでは、1回の授業設計に焦点を当て、学生の主体的な学習に繋がる理論やティップスを取り扱い、参加者間で情報交換を行うプログラム（ver4.0）を実施する。

本発表では、これまでに実施した理工系分野におけるFDプログラムを整理し、現状の成果と課題を報告することで、今後の可能性について議論する。

小学校教諭経験を生かした 大学でのAL実践基礎づくり

◆**発表代表者** 宮崎 大樹（高知学園短期大学 幼児保育学科）

◆**発表概要**

本発表は、小学校教諭経験者が取り組んだ大学におけるアクティブ・ラーニング（以下、AL）の実践報告に省察を加えたものである。小学校教諭、日本人学校教諭、市教育委員会指導主事を経て今年度から短期大学に勤務することになった発表者が、大学においてALをより効果的に進めるために授業の基礎づくりとして取り組んだ内容についてまとめた。学校種に限らず、学習環境を整えることがAL実践の基礎と考え、実践した内容であり、指導主事時代に新任教員や若手教員への指導助言を通して自身が見つめ直した、授業者として大切にすべきと考えている内容を大学でのAL実践基礎づくりとして実践したものである。今後は教員・職員だけでなく、学生の立場から見たFD実践など、様々な立場から授業のあり方について考え提案することによって、大学全体としてのFD実践がさらに一歩前進することが期待できるといえる。

ポスター番号 7

初年次リーダーシップ科目による 学び合いの風土作り

◆**発表代表者** 佐伯 勇（甲南女子大学 人間科学部）

◆**発表概要**

本学では2017年度から、初年次学生の「自分らしいリーダーシップ」を開発する全学共通通年選択科目を開始した。本科目の特徴は3点ある。

①リーダーシップを「チームの目標達成のために他のメンバーに及ぼす影響力」と定義したこと。

②プロジェクト型学習と経験学習の往還モデル。

③先輩学生であるLA（学習アシスタント）が授業運営や学習指導・相談対応を行うこと。今年度は2クラス同時開講とし、準備と振り返りを各クラスの教員とLAが合同で行うことにした。「受講生のリーダーシップの学びを最大化する」という共通目的のもとで複数の教員とLAが協力し、小さいながらも共に学び合う風土が形成されつつある。

本報告では、受講生とLAに対するアンケートと課題の記述内容から、前期授業におけるリーダーシップ特性の変化を示し、教員とLAへのヒアリングから、本授業運営モデルによる学び合いの風土づくりの可能性と課題を明らかにする。

ポスター番号 8

組織の安定運営を支える「優しい」SD —若手職員育成の課題解決への示唆—

◆**発表代表者** 松村 典彦（金沢大学 スーパーグローバル大学企画・推進室／国際部留学企画課留学推進係）

◆**共同発表者** 上島 洋佑（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室）

◆**発表概要**

日本の大学は18歳人口の減少や国の厳しい財政状況等に伴う財政支援の減少に伴い、多くの大学では事務組織の機能強化と合わせて、スリム化・効率化が求められている。例えば国立大学においては、法人化以前の人員に余裕のあった時代には、組織内で徒弟制的に人材育成する体制が整っていた。しかし、現在は時間をかけて育成をすることが難しく、即戦力かつ多機能化が求められている。

SDが義務化され、多くの大学がその具体的な取り組みに苦心する中で、金沢大学ではケースメソッドを用いた意思決定力と人間関係調整力を育成するSDプログラムを開発し、新入職員から管理職までを対象に実践してきた。

本発表では、若手職員の育成について金沢大学の2つの実践を踏まえて、人間関係調整力を養うケースメソッドを用いた「優しい」SDの有用性について明らかにする。

ポスター番号 9

講義のアクティブラーニング(AL)度を 可視化する指標(BAL)を活用した、 全学的なAL推進の試み

- ◆発表代表者 中嶋 克成 (徳山大学 福祉情報学部)
- ◆共同発表者 寺田 篤史 (徳山大学 経済学部)
河田 正樹 (徳山大学 経済学部長)
岡野 啓介 (徳山大学 学長)

◆発表概要

本学は平成26年度文部科学省AP事業(テーマI:AL)の採択を受け、I課題解決型学習の浸透、II通常講義におけるALの活性化、を中心とする組織的・全学的な授業改革を進めてきた。後者に関しては「ミニテスト」や「グループワーク」など、講義内で学生の「学び」への意識を刺激し、ALを促進する手法は多く存在する。そこでまず、当該AL手法を、それによって実現される「学び」の深度に応じ6階層化した(ALヒエラルキー)。そして①教員側が各階層のAL手法をどの程度意識して講義を行ったか、及びその講義に対する学生の反応(②学生目線でのAL度評価、③そのALへの参画度)によって構成する「BAL値(Barometer of AL)」を考案し、オンラインでアンケートを実施・自動集計するシステムを構築した。今回は、ALを用い学生の学びの深化を図る意識をミニマムエッセンシャルと捉え、前記3つのレーダーチャートで表される「BAL値」を指標として活用した授業改革について報告する。

ポスター番号 10

看護教員と教育開発者による 初年次導入科目設計と評価

- ◆発表代表者 中島 正世 (神奈川工科大学 看護学部看護学科)
- ◆共同発表者 伊藤 勝久 (神奈川工科大学 教育開発センター)
鈴木 慶孝 (神奈川工科大学 非常勤講師)

◆発表概要

本科目「スタディスキル」は、大学生として要求される最低限の技能獲得と看護学生として要求される協働性の醸成を到達目標として掲げる初年次導入科目であり、「教えてもらう人(生徒)」から「自ら学び協働的に課題解決が出来る人(看護学生)」への転換を図ることを目的としている。この目的・目標を達成するため、コース全体を以下の2つのパートに分けて構成した。

①Factパート

(文章構造の理解に基づきテキストをとおしての「主張」の掴み/表明ができる)

②actパート

(議論に慣れ、「主張/傾聴」ができ、仲間とともに課題解決ができる)

①②のいずれにおいても、常にツールミンモデルの6要素「議論の構造」を意識させながら活動の達成を目指した。本科目では、協働的にコースを設計するのみならず、教育開発者(ED/ID)を主担当、看護教員(SME)を副担当としてTTを行い、学生の評価およびコース自体も「形成的評価」を中心に運営を行った。

ポスター番号 11

日本の大学における Staff Development の 論点と課題

- ◆**発表代表者** 竹中 喜一（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室）
- ◆**共同発表者** 上島 洋佑（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室）
清水 栄子（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室）
中井 俊樹（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室）

◆発表概要

大学設置基準において、大学職員の能力育成（Staff Development（以下、SD））の機会の設定が2017年度から義務化された。現状は、学外団体主催の研修や、階層別の研修が主流である。

大学設置基準改正に伴う文部科学省からの通知によれば、SDの「具体的な対象や内容、形態等」については、各大学にその特性や実態、各職員のキャリアパスを踏まえた上で判断するよう求めている。これに対する各大学の対応については、個別の大学の事例報告は多少みられるものの、包括的な研究の蓄積は少ない。

そこで本研究では、各大学あるいは大学関連の諸団体が定めるSDの定義や実施方針の文書などのレビューを通じて、現時点の日本におけるSDの到達点と課題を示す。特に、SDの目的や対象者、大学設置基準の定義やFDとの関係などの枠組みで論点を整理する。その結果を通じて、今後、各大学あるいは大学間連携で取り組むべきSDの方向性について示唆を得たい。

ポスター番号 12

学習支援担当者に求められる能力・スキルとは —米国専門職団体を事例として—

- ◆**発表代表者** 清水 栄子（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室）
- ◆**共同発表者** 岸岡 奈津子（立命館大学 学生部OIC学生オフィス）
山崎 その（京都外国語大学 総合企画室）
中井 俊樹（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室）

◆発表概要

ユニバーサル化による学生の多様化に伴い、日本の大学において、学習支援担当者に対する期待が高まるとともに、その能力・スキルの向上が求められている。しかし、能力・スキルの具体的な枠組みは明示化されていない。

米国においては、学生支援の専門職団体（NASPA/ACPA）によって、学習支援担当者に必要とされるコンピテンシーが明示されている。また同じく米国の高等教育規準推進協議会（The Council for the Advancement of Standards in Higher Education: CAS）においても、44部門の高等教育サービスに関するガイドラインにおいて学習支援担当者の能力に関わる記述が見られる。

本発表では、米国において明示化されている学習支援担当者に求められる能力・スキルを整理し、日本における実践へのヒントを得ることを目的とする。

ポスター番号 13

新入生を対象にした 大学に対する価値観に関する調査 -徳島大学SIH道場の改善にむけて-

◆発表代表者 上田 勇仁 (徳島大学 総合教育センター)

◆共同発表者 塩川 奈々美 (徳島大学 総合教育センター)

◆発表概要

徳島大学では、文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）テーマI「アクティブ・ラーニング」に採択され、2015年から全学部・学科必修1単位科目として「SIH道場～アクティブ・ラーニング入門～（以下SIH道場）」を開講している。SIH道場は1年次前期に開講され、学部学科ごとに15の教育プログラムを実施している。各プログラムにおいて、i 専門分野の早期体験、ii ラーニングスキル（文章力・プレゼンテーション力・協働力）の修得、iii 学修の振り返り、これら3つの設計項目が必須で求められている。

本発表では、2018年から新たな取組みとして、SIH道場の中で学生に大学に対する価値観に関する調査を実施した。調査の結果から新入生が大学に対してどのような価値観を持っているのか全国調査と比較し、本学の教育に対する学生のニーズについて考察を行い、SIH道場の改善に向けて議論する。

ポスター番号 14

マイクロレベルのFDから 教育の質保証へつなげる試み

◆発表代表者 Mazur Michal (北海道大学 高等教育推進機構)

◆共同発表者 山本 堅一 (北海道大学 高等教育推進機構)

◆発表概要

北海道大学高等教育研修センターでは、設立以来3年間、FD研修への参加者を右肩上がりで増やしてきた。研修は他大学へも開放しているが、毎年60%以上は北大からの参加者が占めている。研究大学でありながら、教育に対してもしっかりと取り組む姿勢が現れていると言えるだろう。

マイクロレベルのFD研修に対しては、その数を増やすだけでは大学全体の教育改善、教育の質保証には繋がらないという批判的な見方もある。しかし、授業を担当する個々の教員が授業力を向上させていかなければ、多くの大学生に主体的な学びを期待することは難しいだろう。

そこで、北海道大学ではマイクロレベルのFD研修から、どのように教育の質保証へと繋げていこうとしているのか、その試みについて紹介したい。

FDeRによる授業公開と「教・職・学」ピアレビュー

◆発表代表者 三苫 好治（県立広島大学 生命環境学部）

◆発表概要

平成 26 年度に AP 事業テーマ I（アクティブ・ラーニング）に選定された本学では、一般教員の中から FDeR を養成する取組を続け、平成 29 年度末時点で 49 名を数える。様々な角度から AL の推進と普及を担う FDeR 養成のねらいの一つに「AL の授業を公開するとともに、他者の授業を参観し、助言することができる」を挙げた（FDeR 自己評価ルーブリック試作版）。この達成へ向け、授業公開・参観のための FD を実施し、FDeR 間の授業ピアレビューを開始した。平成 29 年度前期は 31 名、後期は 44 名が授業を公開し、前後期とも 44 名の FDeR が参観した。後期に入り、同じく AP 事業の一環で養成している学修支援アドバイザー（SA）の学生による参観を試行し、学生の視点で授業改善に資するコメントを求めた。この授業ピアレビューは平成 30 年度も継続し、事務職員にも参観を呼び掛けている。「教・職・学」の協働による授業改善、教育改革の現状を報告する。

中四国高専による 共通シラバス作成およびビデオ教材開発

◆発表代表者 衣笠 巧（新居浜工業高等専門学校）

◆共同発表者 西井 靖博（新居浜工業高等専門学校）

土居 俊房（高知工業高等専門学校）

長山 和史（高知工業高等専門学校）

青木 薫（米子工業高等専門学校）

藤井 貴敏（米子工業高等専門学校）

中野 陽一（宇部工業高等専門学校）

杉本 憲司（宇部工業高等専門学校）

◆発表概要

大学間あるいは高専間協働共有授業は、各校のリソースの有効利用、学生の幅広い学び、教員の負担軽減など多くのメリットを持つが、設備面、費用面、準備面などの問題を抱えており、普及しているとはいいがたい。一方、化学系学科において「化学工学」分野は、プラント関連企業からは実践的で必要不可欠な内容として強く要望されているが、研究としては細分化、他分野との融合などが進み、「化学工学」を冠した学科や研究室が減少し、その結果、大学・高専で「化学工学」の授業ができる教員が不足している。そこで、中四国地区の高専のうち化学系学科をもつ 4 高専が協働共有事業として、「化学工学」を専門としない教員でも授業担当できること、「化学工学」を専門とする教員はさらに学生の理解度を高めるアクティブラーニングに適用させることを狙いとして、4 高専共通シラバスを作成し、各单元ごとのビデオ教材を開発している。

本発表では、これまでの 4 高専の活動として、共通シラバスの利点、ビデオ教材の活用方法などを紹介し、協働共有授業の課題と今後の展望について議論する。